

復興、生活再建 道半ば

被災地に学ぶ

東日本大震災10年



伊豆新聞 下田支社
下田市東本郷2-9-15
〒415-0035
電話 0558(22) 2555
FAX 0558(22) 2556
松崎支局
電話 0558(42) 3225
FAX 0558(43) 0483

伊豆新聞本社
〒414-0054
伊東市鎌田1290-6
電話 0557(36) 1234

伊豆新聞デジタル
https://digital.izu-np.co.jp

高濃度アルコール入荷!!
次亜塩素酸液携帯用
消毒スプレー無料配布中!!
地酒・焼酎
ワイン・洋酒
地域一番の価格
6-10日は会員
21-25日は恒例
一袋家計簿の整理
もはせせて
リカーショップ シンダ
☎22-0227
酒のアスモ 西中店
☎23-0585

東日本大震災から3月11日で10年。マグニチュード9.0、最大震度7の巨大地震は東北地方を中心に未曾有の大被害をもたらした。警察庁のまとめによると、昨年12月10日現在の死者は1万5899人、行方不明者2527人。今も被災地の復興、生活再建は道半ばにある。南海トラフ、相模トラフを震源とする巨大地震の発生が予想される伊豆地区は被災地から何を学び、どう備えるべきか。復興の歩みと現状、防災・震災伝承の取り組みを通して伊豆の課題を探る。

「大川小の悲劇」

「救えたはずの命」

伝承の会 佐藤さん胸中語る

朽ちた壁や天井に大舎。周囲で震災遺構と、会 共同代表の佐藤敏行方不明のわが子を探津波の痕跡を残す宮城 伝承館の整備が進む。郎さん(57)が語った。し、土を掘り返している保護者がいる。東日本大震災から10年。遺族が今なお震災のただ中にある現実が胸を締め付ける。
6年生だった次女を亡くした佐藤さんは元学校教諭で、当時は隣町の女川中勤務。震災4年後に退職して遺族らと同会を立ち上げ、語り部として現地ガイド、講演会を通じて当時の状況、震災前の同校と地域の様子、命の尊さを発信している。

旧大川小学校舎前で見学者に震災当日起きた悲劇を説明する佐藤さん(右) =宮城県石巻市の旧大川小



旧大川小学校舎前で見学者に震災当日起きた悲劇を説明する佐藤さん(右) =宮城県石巻市の旧大川小

北上市を駆け上がった津波は河口から約4キロ、川沿いの低地に建つ同校を襲った。地震から51分後の出来事だった。同会によれば、児童は激しい揺れが収まった後、校庭に出て

整列。直後、大津波警報が発令され、一部教員、迎えの保護者、児童が裏山への避難を勧められた。市広報車も高台避難を呼び掛けた。だが、児童は校庭に留まり泣く子もいた。教員の指示で児童が避難を開始したのは津波到達のわずか1分前。向かった先は授業で親しみのある裏山でなく、新北土橋のたもと、少し高くなった堤防だった。真っ黒い濁流が子どもを流した。一気のみ込んだ。つづこう続けた。「で

伊東の3小学校統合

「千年に一度」に備え

静岡県が示す第4次被書想定によれば、最相模湾の最大クラス(1.2)地震で、海沿いの伊東市の西小(3階建て、海抜9.1度の地震で津波の影響を受ける心配がある。旭小は通学路が土砂災害(特別)警戒区域に入っている点も防犯上、安全という観点から、市総合教育会議は

犠牲者は全校児童108人中74人と教職員10人。安全であるはずの学校管理下で起きた戦後最悪の事故となった。一部遺族が市と県を相手に起こした損害賠償請求訴訟で最高裁は2019年10月、被告の上告を退け、学校と行政の防災体制の不備を認めた二審・仙台高裁判決が確定した。
「遺族ら「なぜ」真相が全て明らかに」
も置すぎた。簡単に救えたはずの命。最悪を尽くしたとは言えない。
危機管理マニュアルに具体的な避難場所や方法すら記載していなかった学校の防災計画、教職員危機管理意識の欠如に起因した大川小の悲劇は、危機管理の総点検を学校行政に迫った。(下田支社 晴山文人記者)